

ビンディヤ山地におけるバンジャラ村落・ ナハルケーダの変容

友澤和夫*・岡橋秀典**・藤原健蔵**
河野憲治***・ナートM. L. ****

Socio-economic Change of a Banjara Village Naharkheda in Vindhya Range

Kazuo TOMOZAWA*, Hidenori OKAHASHI**, Kenzo FUJIWARA**,
Kenji KOUNO*** and M.L.NATH****

Abstract The purpose of this article is to clarify the socio-economic structure of a Banjara Caste Village, Naharkheda in Indore District, Madhya Pradesh, which did not enjoyed the effect of a dam construction near by. Naharkheda is located in Vindhya Range remote from the District center and used to be suffering from droughts. In addition, the villager belongs to one of lower caste groups, so it was thought that they never developed without public aids.

The following results were obtained

1) Naharkheda was a forest revenue village till 1962. Beside the cultivation, they were able to enjoy 'Nistar Right' which was a privilege to use forest resources. After a loss of the right due to the transfer to a revenue village in 1962, they came to economically depend on agriculture and animal husbandry.

2) There was so small portion of irrigated land that cultivation was mainly conducted in Karif season. Judging from the introduction of commercial crops and improved seeds, the authors thought their will to agriculture was high. Another important economic activity was to rear milch animals for selling milk. Especially the number of she-buffalo has been increasing for the last 30years. But, once a drought happened, both crops and animals were always damaged because there was no irrigation facility in the village.

3) According to the expansion of agricultural activities, the villagers input a lot of money to purchase fertilizers, agricultural chemicals and fodder etc.. Furthermore, whenever they were suffering from a drought, they had to purchase

* 東北大学理学部； Faculty of Science, Tohoku University, Aobayama Aoba-ku, Sendai-980

** 広島大学文学部 総合地誌研究資料センター研究員； Faculty of Letters, Hiroshima University

*** 広島大学生物生産学部； Faculty of Applied Biological Science, Hiroshima University, 1-4-4 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima-724

****； Department of Geography, Vikram University, Ujjain, Madhya Pradesh, India

livestock to compensate for their losses. They borrowed money from private money lenders with high interest with the result that they owed a lot of debts.

4) The largest project which has ever been conducted in Naharkheda was a construction of Choral Dam financially supported by the World Bank. This project aimed to irrigate 3,900 hectares of agricultural land in 27 villages in Mhow and Indore Tahsil. Though Naharkheda was one of the most adjacent villages to the dam, water supply for agriculture was neither performed nor planned. But there was a minor effect of the dam construction. The road condition to Tahsil center was so improved better that they came to use bus services easily. It was thought to be a relation to the increment of milk production.

Totally speaking, Naharkheda was left behind in the public development policy expect for the Choral Dam. The villagers were dissatisfied with a lack of infrastructure related to their daily life. This backwardness was based on not only the natural and locational position of the village, but also their caste characteristics. They belonged to a lower caste which was neither 'Scheduled Tribe' nor 'Scheduled Caste', so they could not enjoy public aids sufficiently.

We could easily find that the villagers' efforts toward development, for example the introduction of improved seeds and the expansion of milk production. These activities, however, did not lead to improve the backwardness in consequence. If there should be departmental agencies, for instance a joint farming and milk society unit and cottage industries with public supports, Naharkheda would come to be better socio economic situation.

目 次

はしがき	2. 土地利用の状況
I. 調査村落の位置と自然環境	3. 転換をはかる農業
1. 位置	4. ミルク生産を指向する家畜飼養
2. 自然環境	5. 個別世帯の農業経営
II. バンジャラ村落の形成	V. 村の収支構成と借入金
1. 村民の特性と村の歴史	1. 収入と支出
2. 他村落とのつながり	2. かさむ借入金
III. 人口の推移と村外移動	VI. 開発政策とその影響
1. 人口の概観	1. チョウラルダムの建設とその影響
2. 村外への人口移動	2. 農業開発政策とその影響
IV. 農業と家畜飼養の展開	むすび
1. 森林徴税村としてのナハルケーダ	

はしがき

インドの農村開発は、第4次五か年計画（1969～73年）以降国家の主要課題の一つに取り上げられたが、現実には地域間・階層間の格差を拡大させた等の問題を伴っている。いわゆる「緑の革命」の成果によって、農業生産が増大し農村開発が成功したパンジャール州やハリヤーナー州のような例とは対照的に、開発が遅々として進まない地域も広く存在している。本稿の目的は、後者に属する農村の現状を地誌学的に理解することであり、具体的には、マディヤ・プラデーシュ州（以下M. P. 州と略称する）インドール Indore 県マフーMhow 郡ナハルケーダ Naharkehda 村を研究対象地域とした。

当村は、マルワ高原のビンディヤ山地中にある山村で、開発中心から隔絶された位置におかれている。また、数年単位で干ばつの被害を被り、県単位で「干ばつ常習地域」に指定されている。このような位置的・自然的に不利な条件に加えて、村民がバンジャラ Banjara という後進性の強いジャーティ単独で構成されるという、社会的な特徴も併せ持っている。したがって、経済的な基盤は強固でないものと予測され、当村の発展には、政府の開発援助が不可欠であると思われる。しかしながら、実際の開発は、ダム建設という村民が直接恩恵を被ることが少ない形で実施された。

このように農村開発から取り残された、ナハルケーダ村の現状を理解する道筋として、以下の3点を設定した。第一は、村の成立や村民の特性といった、調査村独自の社会的・歴史的展開に該当する諸点の考察である。第二は、農業と家畜飼養等の村経済に関する点の解明であり、これらの変化と現状を把握し、さらに村の経済と市場経済との接合を見いだして、当村発展の障害となっている諸点について言及することである。そして、第三は、政府の開発政策・事業と、それらの当村に与えた影響を説明することである。

現地調査は、平成元年・2年度の文部省科学研究費国際学術研究「インド干ばつ常習地域の農業と農村変化」（代表者・藤原健蔵）の一環として、1989年と90年の2回にわたって実施した。悉皆調査（センサス調査と称す）をふまえて、当村を理解する上で鍵となる事項について、標本農家ならびに関係機関からの聴取り調査を行なった。村民の面接調査には、ヴィクラム大学大学院生・学生に通訳兼調査補助者として協力をいただいた。また、当村を対象としたモノグラフが1965年と85年にインド政府から刊行されており、これらを利用することによって、時系列的な考察も可能となった。なお、インドの通貨単位はルピーであり、1990年10月の為替レートは、1ルピーが約7.5円であった。

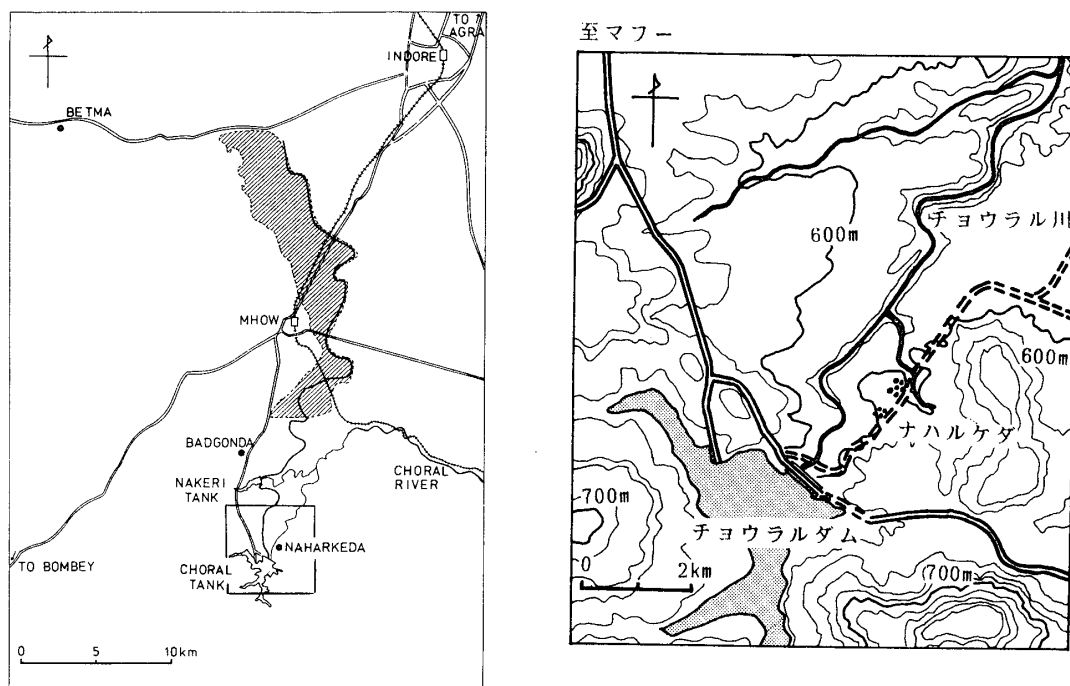


図1 ナハルケダ村の位置
 Fig.1 Location of Naharkheda
 注) 斜線部はチョウラルダムの農業用水供給範囲

1. 調査村落の位置と自然環境

1. 位置

ナハルケダ村は、県の中心であり著名な工業都市でもあるインドール（1981年の国勢調査では人口約80万）からは約42km、郡役所および陸軍の基地が置かれているマフー（同、人口約8万）からは約21km離れている（図1）。最寄りの中心地は、マフーとの中間点に位置するバドゴンダ（同、1,439人）であり、ここには数軒の商店や中学校、郵便局、アユルベダの診療所等が立地している。チョウラルダムサイトからは、マフー行きのバスが毎朝2便出ている¹⁾。村からダムサイトまでは約1.5kmの距離であり、この間の自動車通行は困難である。

2. 自然環境

ナハルケダ村は、ビンディヤ山地の北縁部に位置し、村域は同山地に源を発する、ナルマダ川の支流チョウラル川に沿う河岸段丘面の上に広がっている（図1）。村の標高は約600mで、周囲を700～800mの丘陵地が取り囲む。南部熱帯乾燥性落葉チーク型 Southern Tropical Dry Deciduous Dry Teak Type に属する樹種が、森林を形成している。これらは、政府保存林（Reserved Forest）として保護を受けており、村民による林

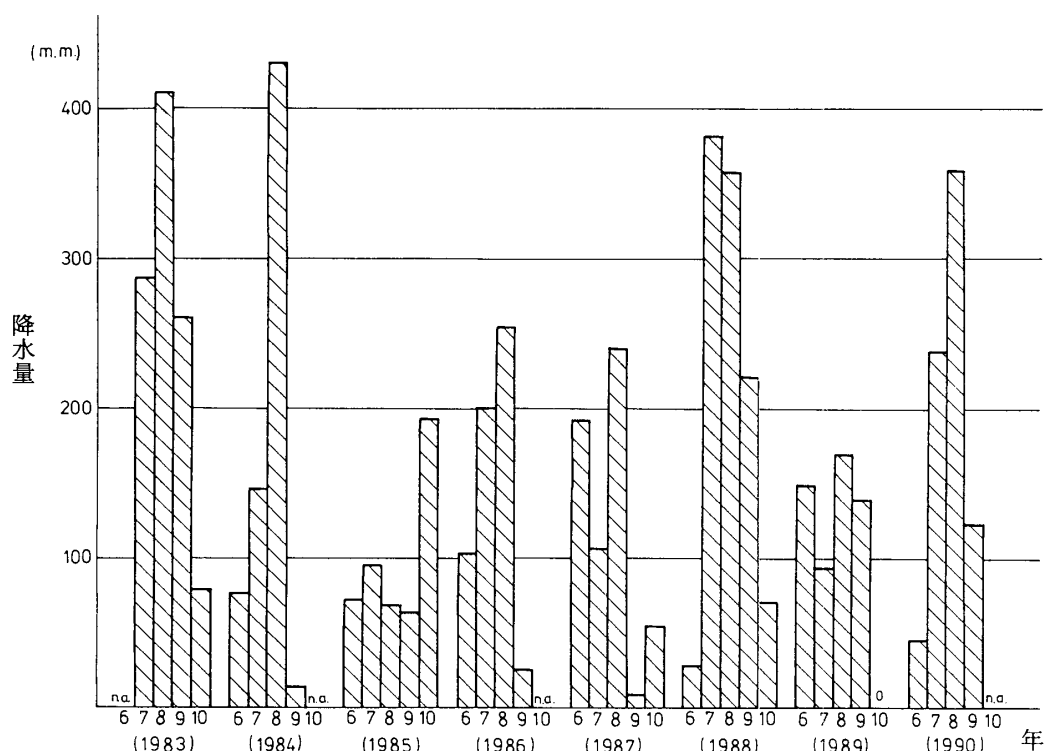


図2 ナハルケーダ村の降水量 (1983-1990)

Fig.2 Monthly rainfall in Naharkheda, 1983-1990

資料：マディヤ・プラデーシュ州灌漑局インドール事務局の資料

野の利用は著しく制限されている。森林内には、パンサー、イノシシ、オオカミ等の動物が生息するが、それらの頭数は森林破壊が進行したので、減少したといわれている。村落内の土壌は、黒土であり農耕に適している。黒土層の深さは約60cmであり、全般的に浅いと判断される。

マフー郡の年平均降水量は1,016ミリであり、大半は南西モンスーンが卓越するカーリーフ期(6~10月)に集中してもたらされる。したがって、農業にはカーリーフ期の降雨が決定的な意味を持ち、寡雨の場合は干ばつが発生することになる。当村における降水量の年変動をみると(図2)、1985年と89年の全降水量が極端に少なかった²⁾。とくに、前者では6~8月の降水量が少なく、後述するように、農作物や家畜に甚大な被害を与えた。

II. バンジャラ村落の形成

1. 村民の特性と村の歴史

当村はバンジャラの単一ジャーティ村落である。バンジャラとは、ヒンディー語で森やジャングルを意味する 'ban' と、放浪者をさす 'charan' という語が合成されてできた言

表1 ナハルケーダ村の略史
Table 1 Brief history of Naharkheda

	1750年頃	1900	1950-1960	1960-1980	1980-
村落社会	ラージャスターンから移住 (運送業に従事) → 鉄道開通による衰退		森林徴税村 →	ランプリア徴税村 人口の急増	人口の微増
政 策			ブーミスワミ制 による土地所有	森林利用の抑制	チョウラルダム建設 小学校・ ハンドポンプ式井戸 の設置
森 林			ニスタール権の享受 林産物への依存	ニスタール権の喪失 林産物の衰退	
農 業		農業の開始	副次的な自給農業		商品作物(大豆)の導入
家畜飼養	森林での林間放牧			家畜飼養頭数の増加	ミルク生産増加 牝水牛の増加

葉とされ、「森の放浪者」という解釈が一般的である³⁾。伝統的には、運送と森林での放牧を生業とするジャーティであり、快活にして陽気、豪放磊落な気質を持つ。18世紀中葉頃に、ラージャスターンから当地域に移住してきたとされ、マフー・インドール等の当地域とラージャスターンのサメルとの間の運送業に携わっていた(表1)。小麦・砂糖・モロコシを運び込み、トウモロコシ・岩塩を持ち帰っていたといわれる。しかし、19世紀後半、両地域間に鉄道が敷設されたため、伝統的な職業を失い、農業の習得とそれへの依存を強めていったとされる(Ballal, 1965)。

この村は、政府保存林の中につくられた村であり、1962年までは森林徴税村として、行政的に位置づけられていた。森林徴税村とは、森林局 Forest Department が森林保護のために保護区を設け、そこに存在する村落を新しく森林徴税村として措置していたものである。徴税に関しては、タシルダール(郡徴税局 Revenue Department の長)が土地徴税台帳を管理するが、実際の税徴収は森林局がとり行なうという二重の行政管理がとられていた。森林局は、1948年に入植割当地を確定し、それぞれの分与地にブーミスワミ権(Bhumiswami)⁴⁾を付して、村民に付与した。1962年、全国的な村落制度の改変に伴い、この村落は徴税局が単独管理する通常の徴税村となっている。また、集落規模が小さいため、ランプリア Rampriya, テランマル Telanmal をあわせた3村落で、ランプリア行政村が構成されていた。しかし、1979年のチョウラルダム建設着工によって、ナハルケーダを除く2村落は水没予定地となり村民の立ち退きが行なわれ、現在のランプリア村は、ナハルケーダ村落のみとなっている。当村の面積は、旧ランプリア行政村のうち水没を免

れた面積117ha が加わって、323ha に広がった (Sharma eds., 1985 p.58)。

1990年現在、当村の世帯数は39であり、母村の集落と、これから分かれた小村 (hamlet) からなる (写真1)。ガンガラムのタンダ (Tanda, 森林の中の遊牧民のキャンプという意味) といわれる母村の世帯数は26戸である。創始者の名前を冠してサクルのタンダと呼ばれる小村が、現在地に分かれたのは1940年頃といわれ、世帯数は13戸である。ガンガラムのタンダとの距離は約250m であり、その中間には小学校が1979年に建てられている。

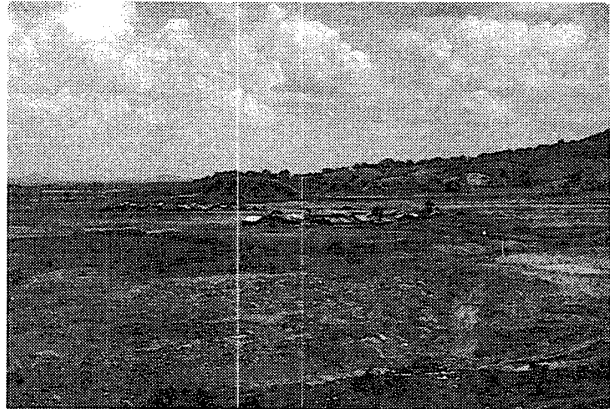


写真1 チョウラルダム堰堤からみた調査村落
Photo.1 A couple of hamlets overlooked from Choral Dam site
手前側がサークルの集落、向こう側がガンガラムの集落

当村の世帯は、一部に欠落があるが、およそ4つの家系にまとめられる (図3)。最大の家系はシャハジャッドの系列であり、39世帯中24世帯がこれに属する。シャハジャッドは現在の世帯主の5~6世代前であるから、18世紀中ごろといわれるこの村の成立当時の人物といえる。シャハジャッドの孫世代で3つに分かれ、長男のラム・シンの子孫が

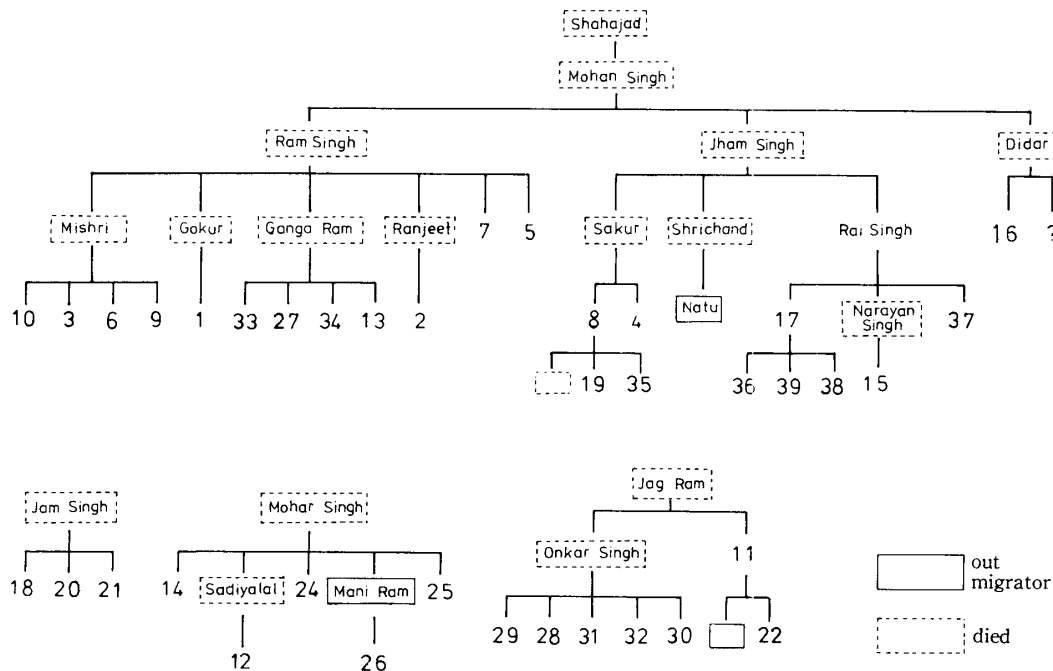


図3 村の主な家系

Fig.3 Main family trees of Naharkheda

注) 番号は表7に対応

母村に住み、次男のジャム・シンの子孫がサクルに分かれて住む。第4図からも明らかのように、兄弟世帯の家屋が隣接あるいは向かい合っ塊をなし、塊同士はあまり関係がないようなパターンで配置されている。これがバンジャラ集落の基本形であるかもしれない。他の3つの家系は、いずれも先祖を2～3世代前にしかたどれず、世帯の数も小さい。ジャグ・ラムの家系（7世帯）とジャム・シンの家系（3世帯）は、母村の中央および入口付近に集住し、モハル・シンの家系（5世帯）は小村でも道路向いの土地にかたまっている。このように、核となる先祖の家から近隣する土地へ分家することによって、現在のような集落が形成されたといえよう。

村民は、自分たちのことをバンジャラ・ヒンドゥーと呼称している。これからも推察できることであるが、当初からヒンドゥー・カーストに属していたわけではなく、現在でもヒンドゥー・カーストとは異なった独自の生活様式を部分的に残している。これは、集落形態にも認められることであって、たとえば、集落内に通路がなく、家屋の配置に村落としての規則性がないこと、またインド村落で通常認められる村民が集まる空地がないことなどである。家の中には一つの部屋しかなく、料理や就寝のための部屋は分かれていない。また、宗教施設も集落から約500m離れた地点に、ハヌマンを祭った小さなほこらがあるにすぎない。上述した集落の特徴は、バンジャラの伝統的な家屋形態、すなわち森林の中のキャンプの形態をとどめているものと解釈される。

そして、集落形態のみならず、文化・社会的な面でも、彼らの特徴は見いだされる。単一ジャーティ村であることは、村落内で社会的分業が成り立たないことを意味している。僧はバドゴングダからよばれ、洗濯・散髪・大工などの仕事は自分たちで行なっている。インド農村において一般的な幼児婚（14歳以下での結婚）の慣行がほとんどなく、男子は19～21歳、女子は16～18歳が平均的な初婚年齢となっている。女子の場合、長時間歯を磨くことなども特筆されよう。また、これも女子の場合であるが、ラージャスターン系の色あざやかなサリーや身に付けている。装飾品なども近隣の集落とは明瞭な違いがある（写真2）。



写真2 村人の服装
Photo.2 Villagers' costumes of Naharkheda

(a) ガンガラムのタンダ



(b) サクルのタンダ

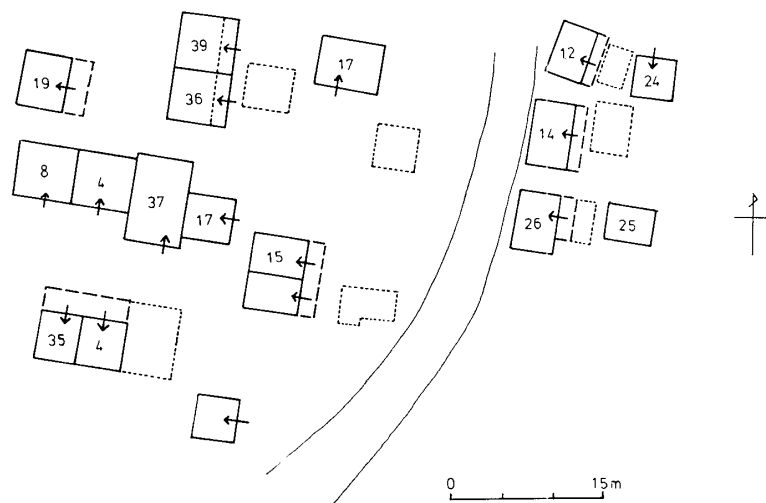


図4 家屋配置 (1990)

Fig.4 Distribution of houses in 1990

注) 実線で囲んだ範囲は家屋を、破線は家畜つなぎ場を、矢印は家屋の入り口をそれぞれ示す。番号は表7に対応する。

2. 他村落とのつながり

(1) カースト・パンチャーヤト

M. P. 州におけるバンジャラの社会組織として、バンジャラ・カースト・パンチャーヤトが重要である。この組織は州内に3つある。ナハルケーダはマフー郡内の他の11村⁵⁾とともに、1つのパンチャーヤトを構成している。当村の代表者は世帯番号4の世帯主である。村外へ移住した人々も、カースト・パンチャーヤトとのつながりは持続するという。1960年頃までは力のある組織であったが、次に述べる行政組織としてのグラム・パンチャーヤトができたことによって、かつて程の機能は持たなくなっている。

カースト・パンチャーヤトでは、おもに家庭内の問題、婚姻・離婚等について話し合われる。バンジャラは他のジャーティとの婚姻を嫌い、結婚は彼らの間でなされているので、この組織の役割は重要である。そのほか社会的な面で問題が生じた場合、最初はこの組織で話し合われ、それでも解決できない時は、警察に任せられる。

(2) グラム・パンチャーヤト

ナハルケーダ村は、隣接するバシピプリ Basi Pipri 村に村役場を置くグラム・パンチャーヤトに属する。このパンチャーヤトは13の村落⁶⁾から構成され、選挙で選ばれた18人のメンバーの合議によって、あらゆる事項について検討し決定して、執行する。とくに、政府資金を財源とする個人融資・物品提供や、道路・電気の導入などのインフラ整備に関係した事項について責任を持つ。現在のサルパンチは、ラルガール村選出メンバーが務めている。当村からは、世帯番号34の世帯主（サブサルパンチを務める）と、女性メンバー（世帯番号は不明、レディーサルパンチ）の2人が選出されている。会合は月に一度の割合でバシピプリでもたれる。

III. 人口の推移と村外移動

1. 人口の概観

ナハルケーダ村の人口は、1990年10月現在、男162人、女138人の合計300人である。ただし、この人口には、村外で寄宿し就学する子供も含んでいる。1961年の139人（男73人、女66人）と比較すると116%の増加である。しかし、1981年から10年間の人口増加率は、ダム建設で農地を失った13世帯が村外へ移住したため、2.7%に留まった（図5）。したがって、人口の自然増加率は、これよりもかなり高いものと思われる。

人口の年齢別構成は、ピラミッド型を呈している（図6）。1961年時点と比較すると、10歳未満層の増加が著しい。1985年頃に家族計画の説明会がダムサイトで行なわれ、村人たちはその概念は知っているようであるが、避妊を実行している夫婦はないという。した

がって、人口流出が無いと仮定すると、人口増加は継続すると考えられる。平均年齢は、19.7歳（男19.6歳、女19.9歳）であった。

2 村外への人口移動

村外への人口移動は、ダム建設による移住（具体的には後述）を除くと、①子供の就学、②村外への半永久的移住、③一時的な出稼ぎ等のケースがある。なお、1980年以降の当村への流入人口は、婚姻によるものを除くと認められない。

①の村外への子供の就学は、センサス調査からは男子のみ18人が確認された。この理由は、村内に設置された小学校が形骸化していること、すなわち教員の出勤が不定期であることに求められる。1990年10月⁷⁾に、授業が行なわれた日数はわずかに1日で、その際の出席児童数は1人であった。村民への聴き取り調査によっても、授業は月に数

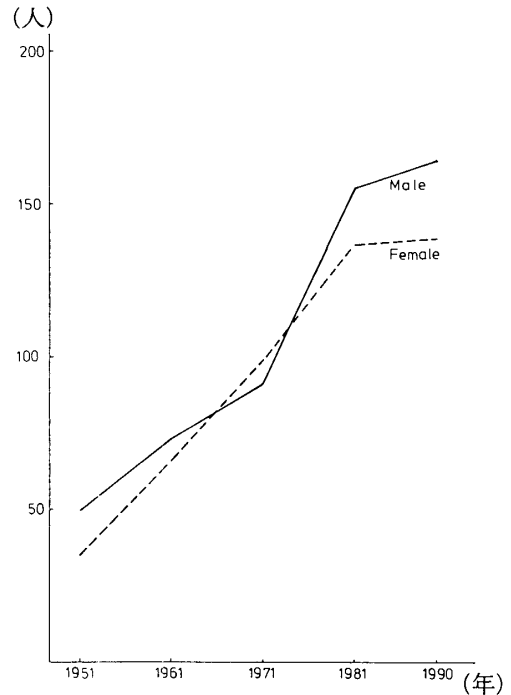


図5 人口の推移
Fig.5 A trend of population, 1951-1990
資料：現地調査および Sharma eds. (1985)p.28

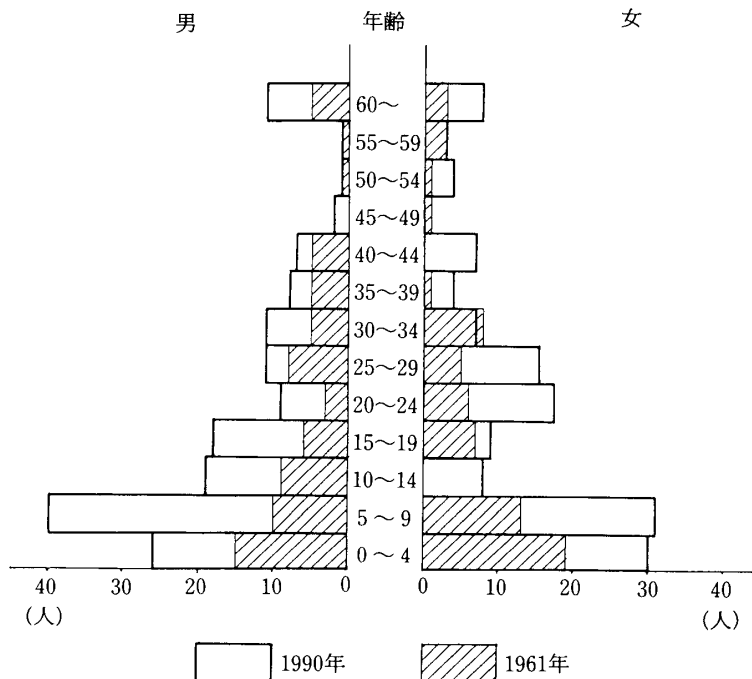


図6 人口ピラミッド
Fig.6 Five year age groups and sex in 1961 and 1990
資料：現地調査および Ballal(1965)p.39

回行なわれるにすぎないという。このため、最近は村の北西約30kmにあるベトマ（図1参照）のバンジャラ・スクール（小学生対象）で学ぶ子供が増えている。この学校には寄宿舎が付設され、州政府の援助を得られるので、学費や諸経費類は無料である。センサス調査からは、当村の子供13人が寄宿していることが確認された⁸⁾。村内の小学校が形骸化しているのは問題であるが、バンジャラ・ス

クールでの教育に対する村民の期待は大きいように思われる。また、村外の中学校で学ぶケースも、3例が認められた。

②の村外移住は家族ぐるみであることを特徴としており、ダム建設に伴うものが大部分であるが、他にも数例が認められる。まず、世帯番号11の長男（55歳）が妻子を伴って、1980年頃インドールへ移住し、大工として働いている。子供3人のうち2人も大工であり、彼らの月収は合わせて計3,700ルピーになり、ナハルケーダの両親に月平均100ルピーを送金している。世帯番号3では、長男・次男が両親とともに村に住んでいるが、三男・四男はインドールで働いている。三男（21歳）は妻子を伴って移住し、雑業に従事する。月収は750ルピーあり、親への送金はしていない。四男（19歳）は子供を村に残しているため、現在のところ③の出稼ぎのタイプといえるが、高校卒業という高学歴からみて、②のタイプに移る可能性は高い。世帯番号14では長男（36歳）が妻子を伴って1980年頃インドールへ移住し、雑業（月収750ルピー）に従事している。

③の出稼ぎタイプは、単身長期にわたるもの、妻は同伴しても子供を村内に残しているものなど、さまざまである。かれらは村とのつながりが強く、センサス調査では当村の住人として扱った。前述した世帯番号3の四男のほかには、マフーに2例、インドールに3例が確認される。前者は、マフーの乳菓子工場で働く世帯番号39の世帯主（23歳、月収300ルピー）と同36の世帯主（26歳、月収450ルピー）である。バス便を利用して、頻繁に帰省しているようである。後者の3例は、世帯番号25の長男（21歳、運転手、月収400ルピー）と次男（19歳、独身、雑業、月収400ルピー）、番号10の長男（17歳、雑業、月収300ルピー）である。

子供の就学やダム建設にともなう移動を除くと、村外への人口移動はさほど多くはない。それは、当村の住人がバンジャラという周囲とは若干異なるジャーティに属すること、また村内にそれなりに安定した農業基盤を持っているためではないかと予想される。しかし、注目されるのは、出稼ぎが20歳前後の若い世帯主・長男に集中していることであり、これが最近7、8年の新しい傾向ではないかと思われる点である。ダム建設に伴い、村の社会・経済的環境が外部に向かって開かれ、結果として、人の移動も活発化する方向に向かっていく可能性がある。

IV. 農業と家畜飼養の展開

1. 森林徴税村としてのナハルケーダ

ナハルケーダ村は、1962年まで森林徴税村であったので、村民は周辺の林野に対しても、ニスタール権 Nistar Right という一種の入会権を持ち、森林生産物の恩恵を被っていた。

具体的には、家畜の放牧や農業資材、家庭用の薪、屋根ふき材料などの無償搬出、家屋建築用材の市価の2分の1での搬出、頭上運搬程度の牛の飼料の採集などの権利が認められていた。そのため、1960年代前半までは、森林生産物は村民の生活全般にとって極めて重要であり、村全体の収入の42%を構成していた (Ballal, 1965, p.31)。1961年の1世帯1か月あたりの森林生産物からの収入は、17.44ルピーであり、農産物からの収入17.27ルピーを上回っていた。

1962年以前においても、決められた以上の森林資源を採集した者には、罰金が課せられ、毎年数人が罰せられていた。1962年に、州政府は従来の森林徴税村を廃止し、通常の徴税村に変更したため、ナハルケーダ村民は入会権を失った。頭一荷の燃料木と家畜用の草、屋根葺き用のチークの葉の採集のみが、現在村民に許可されている利用権である。これを契機にして、村の経済基盤は、森林依存から農業と家畜飼養に傾斜していった。

2. 土地利用の状況

1989年の土地台帳によると、当村の土地利用は、集落0.46ha、耕作地104.55ha、放牧地116.39ha、道路0.35haとなっている (表2)。これを1961年時点と比較してみると、最も大きな変化として、放牧地の増加を指摘できる。1961年には放牧地と記録される土地はなかったが、85年には124haになっている。これは、当村が森林徴税村から徴税村へ移行した際に、ニスタール権喪失の代償として、州政府所有地に放牧が認められたからである。つぎに、休閒地が1985年以降に消滅したが、これはチョウラルダム建設のために灌漑局が買い取ったためである。一方、耕作地が71haから109haへと増加したのは、ランプリア村の水没を免れた面積が加わったからである。ただし、増加分の中の約25haは、他村に移住した旧ランプリア村民の所有となっている。

1989年カリフ期の土地利用の空間的パターンを、図7に示す。母村集落を中心に耕作地が広がり、その外側に放牧地が広がっている。一部の農地で輪作が認められたが、農地利用の周期性の有無は、村全体としては確認できなかった。

政府所有の放牧地の一角に、農民が無断で囲いをつけて、作付を行なっていることがあ

表2 土地利用の変化 (1961-1989)

Table 2 Land use change, 1961-1989

	単位: ha					
	集 落	耕作地	休閒地	荒れ地	放牧地	道 路
1961	0.40	70.98	0.46	50.15	—	0.35
1985	0.40	109.05	0.87	4.05	124.43	0.35
1989	0.46	104.55	—	—	116.39	0.39

資料: 1989年の土地台帳, および Sharma eds. (1985) p.59

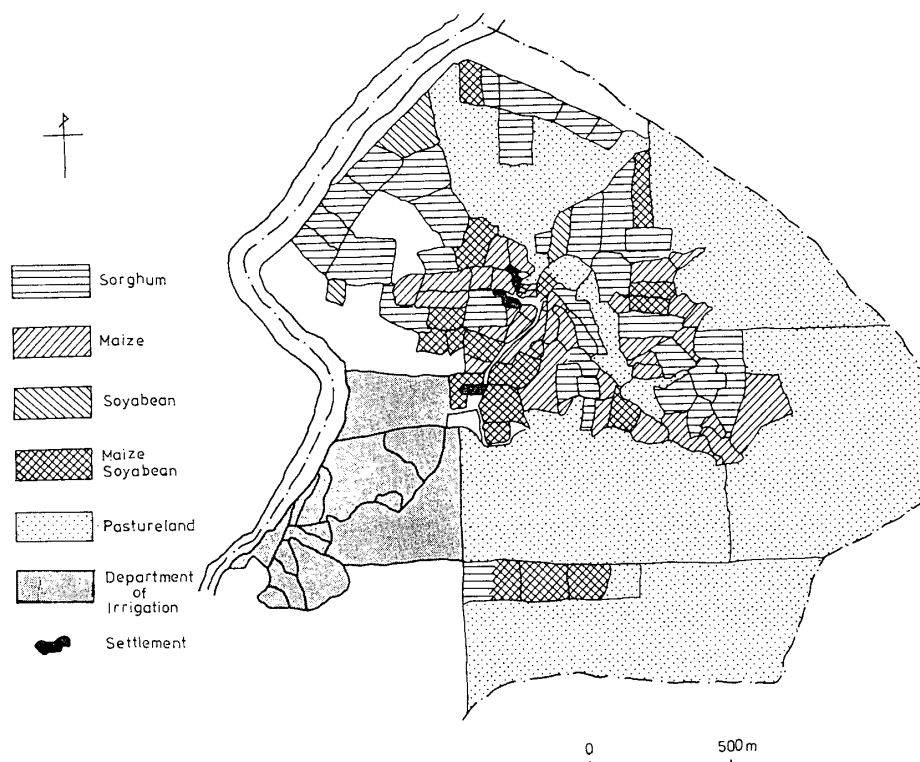


図7 1989年カリーフ期の土地利用
 Fig.7 A land-use pattern in Kharif season in 1989
 資料：土地台帳

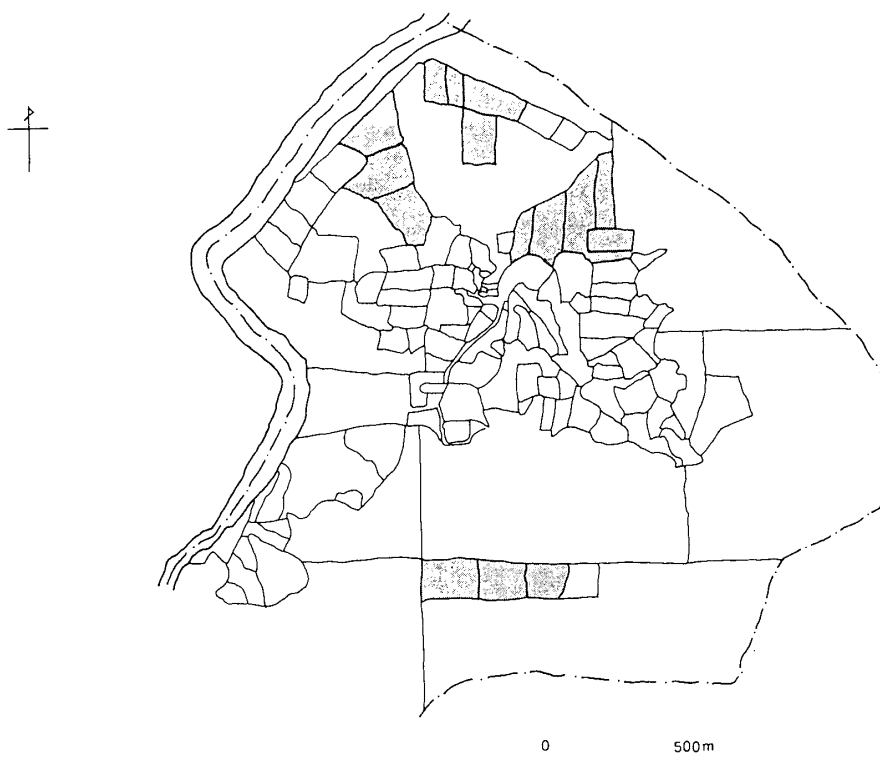


図8 パッタの分布 (1985)
 Fig.8 Distribution of 'patta' in 1985
 資料：Sharma eds.(1985)p.71 および聞き取り調査結果

る。政府所有地の無断耕作は、当局に見つかり、罰金が課せられてきた。しかしながら、このような土地利用は、近年になって土地税を払うことを条件に認められるようになってきた。この使用权はパッタ Patta と呼ばれ、土地台帳にも耕作者の名前が登録されている。1985年には、14世帯が計23.87ha のパッタを保持していた（図8）。このほかにも、土地台帳に登録されていない無断耕作があり、センサス調査で判明したものだけでも9件、約12.4haにも及んでいる。これらには、政府によって罰金が課せられている。

3. 転換をはかる農業

19世紀後半、それまで運送業に従事していたバンジャラの人々は、この地に定着し農業を始めたが、そのやり方は隣村の人々から教わったという。

当村の農業の特色は、灌漑耕地が極めて少ないが、年間降水量が約1,000mmと比較的恵まれているため、天水依存のカリーフ作が主体となっていること、また、場所によって深浅はあるものの、保水性のある黒土におおわれているため、降雨のないラビ期でも作付が可能であることである。カリーフ期には、自給的穀物のモロコシ sorghum・トウモロコシが主に栽培され、商品作物の大豆やその他の豆類がそれらと混作される。混作のパターンは7通り確認され（表3）、モロコシまたはトウモロコシを基本として、それらに各種の豆類やゴマを組み合わせているが、トウモロコシ+大豆の組合せが一般的である。モロコシは、すでに15～20年前にハイブリッド種が導入され、またトウモロコシも在来種に加えて4～5年前に新しく高収量品種2種が導入されている。大豆はM. P. 州政府が奨励する徳用作物となっており、当村には1980年代に地区開発事務所の指導によって導入された。農作物は、マフーまたはインドールの市場で売られている。

1961年と現在のカリーフ期作物の栽培面積を比較すると（表4）、全体として播種面積が2.5倍も拡大したこと、内容的にはモロコシとトウモロコシの地位が高まったことが分かる。また、1961年当時は、綿花がわずかに認められたが、現在は栽培されていない。しかし、大豆は土地生産性の高さから最近とくに好まれ、商品作物の栽培面積は約10倍となっ

表3 栽培作物の組合せ（1990）
Table 3 Mixed cropping patterns in 1990

耕 期	作物名称
カリーフ	モロコシ+大豆, モロコシ+キマメ, モロコシ+ゴマ, モロコシ+ケツルアズキ, モロコシ+アオアズキ, トウモロコシ+大豆, トウモロコシ+ケツルアズキ
ラビー	小麦, ヒヨコマメ

資料：聴き取り調査結果

ている。

一方、ラビー作には、小麦とヒヨコマメが作付される。しかし、灌漑の便と土壌条件の恵まれている場所に限られるので、栽培面積は1989年の土地台帳では14.6haと小さい。これ以外には、レンズマメがごくわずかに認められるにすぎない。小麦は5年前より高収量の改良種が導入

表4 作付作物(カリーフ)の変化(1961-1989)
Table 4 Change of cropping patterns, 1961-1989

作物名称	播種面積 (ha)	
	1961	1989
モロコシ	21.14	57.39
トウモロコシ	12.87	19.91
大豆		3.21
トウモロコシ+大豆		24.04
陸稲	4.97	
綿花	2.89	

資料：1989年の土地台帳、および Ballal (1965) P.27

されている。全般的に、当村の村民は新種の導入に熱心であるように見受けられる。

以上のように、当村における栽培作物の種類は少ない。そのため、農事暦は比較的単純である(図9)。カリーフ作のモロコシとトウモロコシは、ほぼ同時進行的に栽培されている。3月から4月にかけて、犁入れが2, 3回行なわれ、その間に一度施肥がなされる。無灌漑農地では、モンスーンの到来を見越して、5月半ばから6月始めに播種がなされる。灌漑が可能な農地では、この頃に水が施される。8月に再度施肥され、モンスーンが明け9月末から10月に収穫が行なわれる。収穫された穀物は、脱穀機を使って脱穀される。当村では4戸の農家が脱穀機を所有し⁹⁾、非所有の農家にも貸し出される。ラビー作が行なわれる農地では、カリーフ作物の刈り取りが済み次第、犁が入れられ、施肥ののち播種される。そして、1月から2月にかけて収穫が行なわれる。刈り取った穀物の葉や茎は、家畜の飼料として利用されている。

当村の農業発展に支障をきたしている要因の一つは、灌漑農地が少ないことである。現在6世帯が背後の丘陵地から流れ出る溪流や井戸・ため池からポンプで揚水し、農地に散水している。しかし、それらの水源の量はいずれも小規模であるため、灌漑できる面積は

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
モロコシ			×	○	×	×	△		○		◎	◎
					(~)							
大豆			×	○	×	×	△		○		◎	
					(~)							
小麦		◎									×	○
											△	○
											(~)	

× すき入れ △ 播種 ○ 施肥 ◎ 収穫
~ 灌漑

限られている。センサス調査では、灌漑面積は計4.94 haであり、全耕作地の4.7%を占めるにすぎない。耕地の大部分は、チョウラル川の谷底からおよそ15mほど高い段丘面上にあるため、チョウラル川の水を直接利用できないが、後述す

図9 農事カレンダー

Fig. 9 A cultivation calender of main crops

資料：聴き取り調査結果

るように現在計画中の揚水灌漑が実現すれば、当村の農業発展の大きな転機となることは確実である。なお、森林利用の規制後は、牛ふんを燃料として用いるようになり、またマフーの鍛冶屋にも燃料として売られるようになった。そのため、堆肥が不足気味になっている。

4 ミルク生産を指向する家畜飼養

ナハルケーダの村民は、伝統的に家畜の飼養に通じており、現在も多数の牛・水牛・山羊を飼育している。飼育頭数からみると、牝水牛（109頭）、牝牛（100頭）、役牛・種牛（28頭）、山羊（46頭）、牡水牛（9頭）の順となっており、ミルク生産に重点をおいた構成をしている（表5）。牝牛や牝水牛は自家で再生産されているが、役牛・種牛は村内で再生産するのが困難であるため、購入されるケースが多い。山羊は、土地を持たない村民の自家飲用に飼養されている。鶏は、採卵・食肉用として、放し飼いがされている。

家畜飼養頭数の時系列的変化を表6で見ると、役牛・種牛の減少が目される。これは、当村が森林徴税村から徴税村へ切り替えられた際に、森林生産物を採集できるニスタール権を失ったことに求められる。それ以前には、村民は林産物をマフーまで運んで換金しており、その運搬に牛を用いていたが、ニスタール権の喪失によって、牛車の必要がなくなっている。また、現在の現金収入源である農産物やミルクの輸送は、バスで行なわれている。

次にミルク生産の面からみると、牝牛の減少に対して、牝水牛の増加が目される。牝牛の1日あたり搾乳量は約1リットルであるが、牝水牛のそれは3～4リットルである。

表5 家畜飼養頭数(1990)
Table 5 Number of livestock in 1990

	種牛・役牛	牝牛	牡水牛	牝水牛	山羊
自家産	4	89	6	84	40
購入	16	9	4	20	8
その他	8	4		5	
計	28	102	10	109	48

資料：聴き取り調査結果

表6 家畜飼養頭数の変化(1961-1990)
Table 6 Change of livestock, 1961-1990

	種牛・役牛	牝牛	牡水牛	牝水牛	山羊
1961	51	126(3)	2	80(17)	5
1985	39	72	n.a.	92	12
1990	28	102(38)	10	109(48)	48

資料：聴き取り調査結果, Sharma eds.(1985)p.107, および Ballal(1961)p.30
注) () 内はミルクを産する頭数を示す。

そのうえ、水牛ミルクの市場価格は牝牛のそれより若干高い。当村の家畜飼養が市場指向のミルク生産に専門化するにしたがって、経済的に有利な水牛に重点が移るようになったといえる。このことは採乳可能な頭数を増加させる努力にも認められ、1961年に比較して牝牛・牝水牛ともに採乳頭数の比率が高まっている。しかし、それは牝牛の場合で37%、牝水牛の場合で44%にすぎず、決して高いものとは言い難い。現在、ほとんどが屋外飼養であり、飼料の面でも改善の余地が多く、また病気への対応も十分でない。ミルク生産を増やすには、なすべきことが多いように見受けられる。

牝牛と牝水牛からの採乳は主要な現金収入源となっており、村経済における地位を高めてきた。ミルクは自家消費分を除いて、生乳のまま、あるいはマワ（乳菓子の原料）にされ、バス便でマフーへ運ばれ換金される（写真3）。平均すると、ミルク1リットルは4～5ルピーで、マワは15～20ルピーで取り引きされている。

家畜の頭数変化は干ばつの前後で著しい。1985年の干ばつの際には、村全体で約60頭の家畜を失ったといわれる。世帯番号14は、12頭の水牛を失い、世帯番号12では、牝牛2頭・牝牛3頭・牝水牛5頭を、世帯番号8は牝牛1頭・牝牛4頭・牝水牛4頭をそれぞれ失ったという。干ばつで失った家畜は、マネーレンダーから借金をして補うことになるが、搾乳用の牝水牛の場合は、1頭6,000～8,000ルピーと高額であるため、干ばつ発生の際に借入金がかさむという悪循環が繰り返される。

家畜飼養の日課は、ほぼ以下のようなものである。日の出の頃に軽く飼料が与えられた後、集落から1、2 km離れた放牧地や森林に放牧される。村の東部から東南部にかけては標高700m程度の丘陵地がひかえており、丘陵地の下半部は徴税局の管轄、上半部が森林局の管轄となっている（写真4）。徴税局管轄区域は採草・放牧地用に村民の使用が認められ

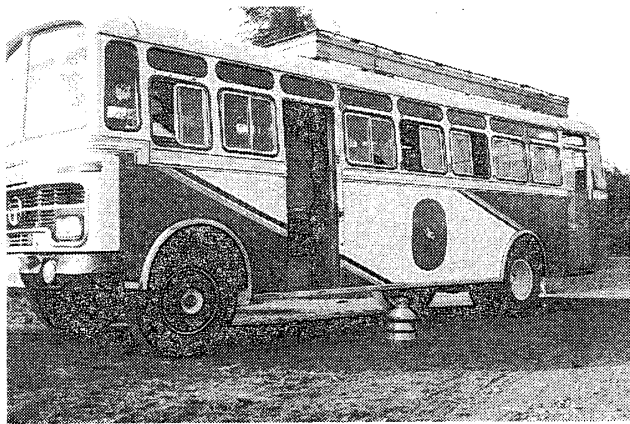


写真3 バスによるミルクの輸送
Photo.3 Transportation of milk by using of a bus service

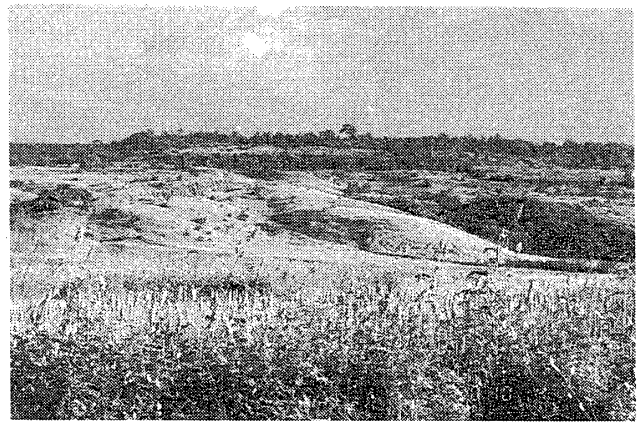


写真4 調査村の背後丘陵
Photo.4 Hills behind the surveyed village
注) 植被の厚い上半分は森林局管轄、下半分は徴税局管轄

ているが、森林局管轄区域は政府保存林であり、通常は利用を禁じている。そのため、家畜が好む草や樹木の葉が多いので、放牧中の牛がまぎれこむため、牧童たちは注意を怠ることができない。家畜は日没の前に集落に戻され、再度飼料が与えられる。集落内には、家畜小屋といったものはなく、降雨や強い日射をさえぎる程度に木の枝や葉で天井を覆った一区画（家畜つなぎ場）があるのみである（写真5）。したがって、気候の変化で家畜が病気にかかることが多く、またモンスーン季の集落内は牛糞で泥沼のようになっており衛生的とは言い難い。なお、収穫後の畑地では、刈跡放牧が行なわれる。基本的には、当村の家畜飼養は、自給・購入飼料と放牧地・山林での放牧に支えられているといえるが、近年の傾向として、飼料への投入金が増えている。

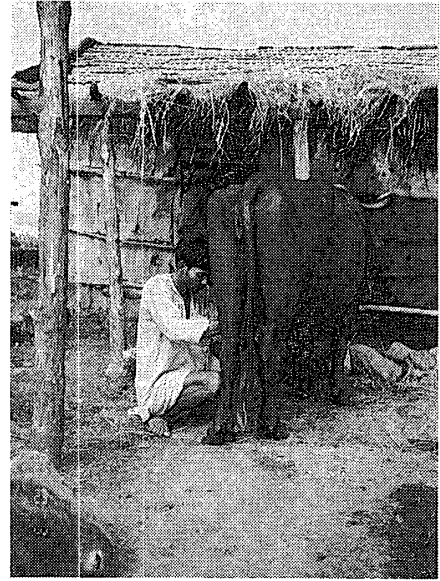


写真5 家畜つなぎ場
Photo.5 A cattle shade with a milking-buffalo in the settlement

5. 個別世帯の農業経営

表7に世帯別の農業経営の状況を示す。経営耕地面積ついてみると、1980年に比して増加した世帯は13戸である。増加の理由で最も多いのは、父親の死去に伴う遺産相続である¹⁰⁾。最近では、世帯番号3, 6, 9, 10の兄弟が、7～8年前に死亡した父親の土地を3.45haずつ均分に相続した。その他の世帯についても、耕地面積を比較してみると、兄弟間で類似したものが多く、当村でもインド農村で一般的な均分相続がなされているといえる。一方、土地を持たない世帯も5戸ある。これらはいずれも親が存命中であり、現在は土地を保有していないものの、いずれは均分相続によって土地を保有することになる。しかし、均分相続による一世帯当たりの所有規模の縮小は急速に進んでおり、その対策として村外への移住や出稼ぎが増える傾向にあると判断される。

経営耕地拡大の他の方法は、購入および政府所有地の囲い込みである。前者については、0.35haの土地が7,050ルピーで売買された1例があったのみである¹¹⁾。後者については、前述したように9世帯が計12.4haの政府用地を不法に囲い込んでいることがわかった。なかには、囲い込みによる土地が、自己の経営耕地面積の半分以上を占める例もある。

世帯番号15は土地を減らした唯一の例であるが、これはダム建設のために灌漑局に農地を買い取られたためである。しかし、その売却金を用いて、ベトマに1.4haの土地を1980年頃購入している。

表7 世帯別の農業経営状況 (1990)
Table 7 Summary of all households in 1990

世帯 番号	経営耕地面積 ¹⁾		牛乳生 産量 ²⁾	家族員数		農外 ³⁾ 就業	農産物 販売額 (ルピー)	負債額 (ルピー)	家畜飼養頭数 ⁴⁾			備 考
	1980	1990		男	女				牝牛	牝水牛	山羊	
1	11.5	11.5	0	4	5		0	20,000	2	1	0	
2	4.6	7.36(1.38)	293	15	11		2,000	6,000	10(2)	6(2)	0	脱穀機,ポンプ,井戸
3	0	4.14(0.69)	180	6	11	○	1,800	0	5(2)	9(2)	5	ポンプ
4	3.45	3.45	551	1	3		2,750	2,000	3	8(5)	0	
5	3.45	3.45	330	3	5		500	0	0	8(1)	0	脱穀機
6	0	3.45	300	3	2		2,080	4,000	1(1)	4(2)	0	
7	1.61	3.45(1.61)	272	9	10		0	10,000	8(3)	10(4)	2	脱穀機,ポンプ
8	3.45	3.45	258	7	7		5,500	4,000	5	11(5)	0	ポンプ
9	0	3.45	90	1	3		2,000	4,000	2(1)	0	2	
10	0	3.45	90	4	2	○	300	0	3(1)	5(3)	0	井戸
11	3.22	3.45	30	1	1		0	0	3(1)	0	0	
12	1.15	2.99(1.84)	510	3	6		1,350	0	3(1)	4(3)	0	
13	0	2.88(2.07)	600	3	3		3,000	0	4(4)	2(1)	0	ポンプ
14	0	2.53(1.15)	135	4	4	D.O.	1,400	0	3	2	0	ポンプ
15	5.75	2.3	360	8	7		1,100	0	10(3)	9(2)	1	
16	2.3	2.3	60	3	5		1,500	4,000	1(1)	1(1)	0	
17	2.3	2.3	0	4	3	○	600	2,000	0	0	0	井戸
18	1.84	1.84	210	5	3		600	1,000	0	4(2)	0	
19	0	1.84(1.84)	170	5	1		4,000	10,000	0	2(2)	1	脱穀機
20	1.38	1.84	30	5	6		1,600	0	2(1)	0	2	
21	1.84	1.84	0	2	1		1,000	2,000	0	0	0	
22	1.84	1.84	0	0	1		2,400	0	0	0	0	
23	0	1.5(1.15)	340	1	1		0	8,000	0	9(3)	1	
24	1.15	1.15	120	7	1		200	0	0	1(1)	1	
25	1.15	1.15	0	5	3	○	2,000	0	0	0	0	
26	1.15	1.15	0	4	3		840	1,500	0	0	0	
27	0.46	1.15(0.69)	0	4	4		1,400	9,000	4	0	0	
28	1.15	0.92	202	4	2		0	4,000	4(1)	2(1)	0	
29	0.92	0.92	60	3	2		1,000	0	0	2(2)	0	
30	0.92	0.92	60	2	1		0	5,000	2(1)	1(1)	5	
31	0.92	0.92	60	1	3		0	5,000	2(1)	0	0	
32	0.92	0.92	n.a.	4	1	D.O.	n.a.	n.a.	1	0	0	
33	0.46	0.46	210	4	4		2,800	6,000	9(3)	2(1)	0	
34	0.46	0.46	36	5	2		500	8,000	4(1)	1(1)	1	サブサルパンチ
35	0	0	420	6	3	D.O.	0	1,000	3(3)	2(2)	6	
36	0	0	273	4	1	○	0	0	1(1)	3(1)	5	
37	0	0	120	6	2		0	0	5(2)	0	12	
38	0	0	60	3	3		0	0	2(1)	0	0	
39	0	0	0	3	2	○	0	0	0	0	4	

資料：聴き取り調査結果

注1) 面積の単位はhaである。村民からはピガーという単位で聴取り (1ピガー=0.23ha), それをhaに換算した値を示した。()内は, うち不法に囲い込んだ面積を示す。

2) 単位はリットル/年である。

3) D.O. : ダム事務所への勤務者, ○: 村外への出稼ぎ者, がそれぞれあることを示す。

4) ()内は, ミルクを産する頭数を示す。

脱穀機や揚水ポンプ等の購入にみられる農業への大きな投入は、経営耕地規模が上位にある農家に限定される。農産物販売額は、マネーレンダーへの現物返済を考慮すると、上位農家が幾分多いようである。中・小規模の農家でも、大豆などの商品作物を主体に栽培する場合は、ある程度の農産物販売額がある。一方、経営耕地面積が小さい世帯、あるいは土地を持たない世帯でさえ、一定の家畜を飼養し、ミルクの生産を行なっている。また、家畜飼養は経営耕地面積の大きい特定世帯に集中するわけではなく、全般に分散的に飼養されている傾向がある。このように、農業経営と家畜飼養との間には、いくつかの傾向は認められるが、村全体に通じる関係とはなっていない。このことは、森林依存から農業へ、あるいはダム建設を契機とする外部との接触増加など、村を取り巻く経済環境の変化に対して、村人たちが様々な形で対応しているという、いわば漸移過程にあるためと解釈できる。

V. 村の収支構成と借入金の発生

1. 収入と支出

(1) 収入

ナハルケーダ村民の主たる収入源は、農作物・ミルクの販売、農業労働（1日あたり15～20ルピーになる）、家族からの送金の3つである。先述したように、その中でもミルク販売に負うところが大きい。ミルクを販売する世帯数は19戸あり、月産で約4,000リットルを市場に出している（表8）。ミルクの取引価格は季節によって変動があるが、年平均では、1リットルが約4ルピーである。マワの場合は、1リットルが17.5ルピー程度である。年間のミルク・マワ販売額は、一世帯あたり約4,800ルピーと見積られる¹²⁾。

農産物では、大豆が主として販売されている。1989年には、村全体で約3.9万ルピーの販売がなされており、うち88%を大豆が占めている（表9）。一世帯あたりの農産物販売額は、約1,100ルピーとなる。農産物・ミルクの販売に、農業労働等の他の部門からの収入を加えると、一世帯あたり7,000～9,000ルピーが平均的な年収であると予想される。

表8 一月平均ミルク生産・販売量（1989）

Table 8 Average milk production and selling per month in 1989

	販 売		自家消費	
	ミルク	マワ	ミルク	マワ
生産量(リットル)	4,065	304	2,061	0
販売額(ルピー)	16,260	5,320	—	—
農家数	19	4	30	0

資料：聴き取り調査結果

表9 農作物販売額 (1989)
Table 9 Amount of agricultural products in 1989

	モロコシ	トウモロコシ	ゴマ	大豆	計
販売額(ルピー)	3,930	1,300	90	38,900	44,220
構成比(%)	8.9	2.9	0.2	88.0	100.0
販売農家数	2	4	2	24	

資料：聴き取り調査結果

(2) 農業投入と支出

農業投入については、38世帯より回答を得た。それによると、1989年には一世帯あたり、約5,000ルピーが農業に投入されている。中でも家畜の飼料購入に当てる金額が大きく、これのみで全体の86.7%を構成する(表10)。一頭当りのミルク生産量を高めるためには、それに適した飼料の購入が必要になっている。

一ヶ月の生活費については、35世帯より回答を得た。それによると、合計22,850ルピーが消費に向けられている(一世帯平均で、653ルピー)。単純に考えると、農業投入と生活費を併せて、当村民は年間一世帯あたり約1.3万ルピーを支出しているといえる。

表10 農業への投入 (1989)
Table 10 Input into agricultural activities in 1989

	化学肥料	有機肥料	農薬	種子・苗	飼料	計
投入額総計	9,150	3,350	935	11,775	164,080	189,290
一世帯平均	240.8	88.2	24.6	309.9	4317.9	4981.3
構成比 (%)	4.8	1.8	0.5	6.2	86.7	100.0

単位：ルピー

資料：聴き取り調査結果

2. かさむ借入金

上述した大豆等の商品作物の導入、およびミルク生産の増加は、政府の指導奨励によるところが大きい。肥料・農薬・飼料の購入を不可欠とするため、多額の資金投入が行なわれてきた。とくに、村の経済の主要部門となった家畜の飼料購入への出費は大きい。これらは自己資金のほか、借金によって賄われている。また、干ばつのたびに家畜が失われ、それを補うためにも村民は多額の借金を背負い込んでいる。これらは、積極的に農業生産の維持と拡大を図った結果といえるが、多数の世帯で支出が収入を上回り、大きな借入金を抱えている。政府の様々な農村開発政策により、制度上は銀行から借入ができるようになっているが、手続きが煩雑なことや急場の用に役立たないことから、村民の多くは専らマネーレンダーに借入を依存している。

センサス調査からは、38世帯のうち21世帯で、合計116,500ルピーの借入金があること

が確認できた。これは1世帯平均で5,548ルピーに及ぶ。借入先は21世帯中12世帯が、マフーのマネーレンダーとなっている。借入の利子は、若干誇張があるものと思われるが、平均して月に3%と高い。現金での返済は困難で、様々な返済方法がとられている。たとえば、マネーレンダーの農地で一年間労働する、決められた量のミルクやマワを市場価格より低い値段でマネーレンダーに売る、作付けのために借りた種子を収穫後2倍にして返す、などがある。このため、ミルクやマワの販売価格も低く抑えられている。また、肥料や飼料・種子などもマネーレンダーから市場価格より高い値段で買わされるという。1961年の調査でも、借金の主たる目的が農業への投資にあることが指摘されており、この状態は30年間継続しているといえる。したがって、私的なマネーレンダーは、独立後法律できびしく禁止されたはずであるが、実際は現在に至るまで村経済を支配しているといえる。

VI. 開発政策とその影響

1. チョウラルダムの建設とその影響

近年における当村の最も大きな変化は、チョウラルダムの建設である。このダムは、世界銀行の融資を受けて、村の南西約1kmの地点に高さ20m、長さ600mのロックフィル堤防を築きチョウラル川の水を貯水したものである。マフーからインドールにかけての近郊農業地帯3,900haへ、灌漑用水を供給することを主たる目的としている(図1)。1979年にダムの建設工事が開始され、1987年に貯水が始まり、1991年から灌漑水が送られることになっている。

当村は、ダムに隣接しているにもかかわらず、当初計画段階より貯水池からの水供給は予定されていなかった。それは、当時の政治状況の下では、村民ならびにグラム・パンチャーヤトのダム建設に対する意識は低く、地元の要求を計画にほとんど反映させることができなかったことによる。その後、地元からの要求が強まり、それに応える形で、チョウラル開発計画とは別個にチョウラル川からの揚水灌漑計画が浮かび上がり、現在その調査が進行中である。村民の大多数はこの揚水灌漑計画に賛成しているが、これに反対する声もあり、統一したものになっていない。こうした混乱の底流には、チョウラルダム建設において生じた政府開発事業に対する村民の不信と不満が、原因しているようである。たとえば、ダム用地として、何人かの村民が農地を売却したが、その金額が隣村の指定部族よりも低く抑えられたという不満が残っている¹³⁾。水没の補償費も、マネーレンダーに持って行かれたという例もある。また、ダム建設後、チョウラル川の水量が減少したため、揚水灌漑には不十分であるという意見もある。

チョウラルダム建設がナハルケーダ村の社会経済に与えた影響はどうであろうか。まず、

雇用面では、ダム事務所に村民3人が雇用されている。その他にダムの維持・補修等の臨時雇用があるが、これには近隣村の指定部族が優先され、この村には回ってこない。第2は交通条件の改善であり、ダムサイトまでの舗装道路の建設とマフーまでのバス路線開業など、大いに評価すべきものがある。これによって、ナハルケーダ村での販売用のミルク生産が可能となり、村の経済発展を刺激したことは否定できない。しかしながら、ダムサイトのバス終点から当村までの1kmの区間は、いぜん牛車でも通行困難のままに放置されているため、村民には交通が便利になったとの実感が湧いてこないようである。

ダム建設にともなう村外移住は13世帯であり、うち5世帯は移転補償金によって親戚が住むベトマに代替農地を取得し、農業に従事している。また、これを機会に、4世帯がインドールに、2世帯が近隣の村へ移住したことが確認された。残る2世帯の移住先は不明である。

2. 農村開発政策とその影響

インド農村は、1970年代後半から諸種の開発事業によって、生産基盤や生活環境にみるべき改善がなされてきた。ナハルケーダ村においては、1979年の小学校の建設、1984年の飲料水用のハンドポンプの設置があったものの、他村に比較して相当の遅れを指摘できる。かつては隣村まで貰い水に行ったといわれるが、ハンドポンプによって女性はその労苦から解放された。しかし、小学校については、前述したように教員が不定期にしか出勤してこない状態であり、ほとんど廃校同然である。寄宿別のバンジャラ・スクールがベトマにあるものの、これに子弟を送ることのできる家庭は限られ、学齢期の子供全体の就学率を高めることにはならない。若年男子層を主体に識字率の上昇は認められる(表11)が、問題として指摘したい。

発展に対する村民の意識は、表12のように整理される。村の状態が10年前と比較して良くなったと認識している人は、27人中わずか3人であり、変化なしが13人、悪化した

表11 コーホート別識字率の変化 (1961-1990)
Table 11 Change of literacy rate by age groups, 1961-1990

年齢層		5-9	10-14	15-24	25-34	35-44	45-	単位：% 全年齢層
1961	男		11.1	7.7				2.7
	女							0.0
1981	男	22.9	64.7	12.1				14.8
	女	24.2						4.4
1990	男	70.0	73.7	55.6	37.5	40.0	0.7	45.1
	女	16.7	3.2					4.3

資料：聴き取り調査結果、および Sharma eds. (1985) p.38

表12 村民の発展に対する意識

Table 12 Villeagers' consciousness to development

10年前の状態と比較して村は			最近10年間の発展（複数回答）			
良くなった	変化なし	悪くなった	井戸	小学校	ダム	なし
3	13	11	22	21	2	5

村民の改善要望事項（複数回答）

灌漑用水	電気	道路	ローン	仕事	病院	教師	政府援助	役所業務	その他
20	19	15	11	4	4	2	2	2	6

資料：聴き取り調査結果

11人を数える。悪化したとする主な理由は、物価の上昇である。この10年間の発展項目では、ハンドポンプの設置および小学校の建設が主体を占め、ダム建設を発展と評価した人は、2人ととどまる。また、何等発展がなかったとする回答者も5人いる。村民が村の改善事項として望んでいるものは、灌漑用水の建設、電化、道路整備、借りやすい公的ローンであり、そのほかに雇用機会の拡大とともに、病院・教員・役所等公的サービスの向上が強く望まれている。

総合的に考えると、ナハルケーダ村では道路・電気等の基礎的インフラストラクチャーの整備が遅れており、村民もこれに対して強い不満を持っている。このように村落開発が遅れた要因としては、第1は、ダム建設という灌漑局所轄の比較的大きな開発事業の陰に隠されて、村落開発がないがしろにされてきたこと、第2は、村民がバンジャラという後進ジャーティであるため、グラム・パンチャーヤトの中でもその立場が採用されにくく、他方では指定カースト・指定部族でないために十分な公的サービスを受けられないことが関係しているものと思われる¹⁴⁾。

むすび

本稿では、ダム建設が間近かで行なわれたにもかかわらず、その恩恵に浴することのできない、「干ばつ常習地域」の山村の現状を理解することを目標として考察を行なった。その結果を要約して図10に示す。

調査村落の特徴は、まずその住民構成に求められた。当村は、バンジャラという、伝統的には運送業に従事してきた後進ジャーティが、定着して形成した村であった。単一ジャーティの村であるため、村落内での社会的分業関係はなく、バンジャラ特有の生活様式を一部残している。

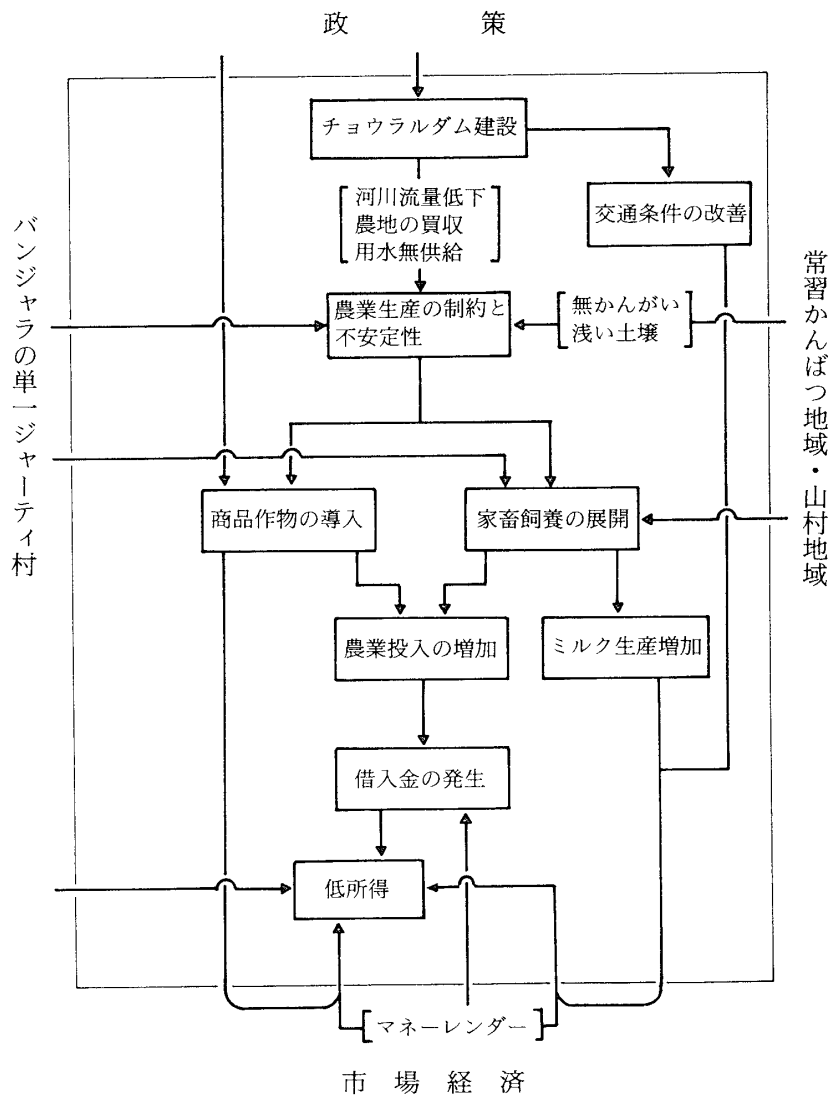


図10 ナハルケーダ村の社会経済システム
 Fig.10 An outline of socio-economic system in Naharkheda

1962年の森林徴税村から徴税村への行政的な切り替えと、同時に林野の入会権を失ったことで、村落経済の転機が訪れる。それまで重要であった森林生産物の地位が、絶対的にも相対的にも低下し、農業と家畜飼養が中心となった。農業については、非灌漑農地が多く、カリーフ作が主体となっている。1980年代に入ってから、大豆等の商品作物が導入され、村民に現金収入の道を広げた。新品種導入や農業への資金投入の状況は、村民の営農意欲が高いことを示す。さらにまた、ダム建設に関連してマフーまでの交通条件が向上したため、販売用ミルク生産に重点を置いた家畜飼養が伸びており、牝水牛の頭数が増えている。この家畜飼養は購入飼料に大きく依存しており、農業投入の大部分を占めている。

こうした商品作物の導入、ミルク販売指向の家畜飼養が進行する中で、各農家の経営は

悪化し、負債の増大という大きな問題を抱えている。加えて、干ばつで失われた家畜の補充が、借入を発生させる原因となっている。さらに悪いことに、この借入が公的ローンではなく、高利の私的なマネーレンダーに依存していることであり、負債の増大によって、農産物・ミルクの販売、種子・飼料等の購入にもマネーレンダーを関与させる結果となっている。最近30年間の短い期間に、閉鎖的な森林経済から自給的な農業への転換、ついで急速な商業化という変化の中で、安定的な営農形態を確立する前に、各農家ならびに村の経済は危機にさらされている。

ナハルケーダ村の発展を考える場合、一刻も早くマネーレンダーのとの関係を断つことが、最重要課題である。それには、公的ローン利用の道を広げ、マネーレンダー依存の体質を改めさせる必要がある。第2は、現在計画中のチョウラル川河床からの揚水灌漑を実現し、農業生産の安定と向上を図るとともに、家畜飼養のインフラストラクチャーを整備して、干ばつによる家畜の損害を最小限にとどめることである。第3は、協同組合を設立して、農産物・ミルクの販売、資金の調達などを組織化することであり、村民たち独自の対応が望まれる。この村は等質的な集団であり、組合化は容易であると判断される。このような組織が設立されるならば、揚水灌漑の実現も村への進入道路の建設も促進されるであろう。もちろん、行政的な援助と指導を必要とするが、村民側の開発への姿勢が不可欠である。

本稿の概要は、1991年度日本地理学会春季学術大会において発表した。

注

- 1) マフーで定期市が開かれる土曜日には、3便が出る。
- 2) 当村の降水量は、チョウラルダムサイトにある降雨計で把握される。観測は降雨が集中する6～10月のみ行なわれている。
- 3) バンジャラについては、Russell and Hiralal (1916) が詳しい。バンジャラは指定部族や指定カーストではないが、インドの社会階層の中では、後進層 Backward Class に位置づけられるジャーティである。
- 4) ブーミスワミ権とは、M. P. 州の Land Revenue Code の158条に規定されている土地所有権であり、小作権より上位の土地所有権である。借受人に対して、何等の事前通告なしに、その土地の所有権を停止することができた。また、借受人は、土地の所有権の譲渡、抵当権の設定、贈与を禁じられていた。森林の保護・民衆の定着を、おもなねらいとした制度である。
- 5) カースト。パンチャーヤト構成村は、以下の通りである。
ナハルケダ、ラルガール、チャルディブラ、アムリブラ、クランデール、バシピップリ、チョティジャム、ランプリヤ、ガジベディ、ジラート、ガルワールサルワール
- 6) グラム・パンチャーヤト構成村は、以下の通りである。
バシピップリ、バディヤ、ジンカディヤケディ、マンガリヤ、マウディブラ、ケリヤコリ、ナハルケダ、ランプリヤ、ガジベディ、ラルガール、ルンダ、カンデール
- 7) 10月には、ダサラ、ディウアリというヒンドゥー教徒の祭礼が続くので、通常の日よりも休日は多く

なる。

- 8) ただし、バンジャラ・スクールに就学している児童からの聴取りによれば、当村出身の児童数は25人であるという。
- 9) 脱穀機の購入には、約1万ルピーが必要である。
- 10) 父子および兄弟関係は、図3を参照されたい。
- 11) この情報は、世帯番号23から得たものであり、同1はこの10年間農地面積に変化はないと答えている。
- 12) 村民は、ミルクや農産物販売等の収入面に関しては、過小に回答しているものと思われる。実際には、販売農家数・販売量ともに、表8の数字を上回るものと考えた方がよい。支出額が収入を大幅に越えるのも、このためであろう。
- 13) バンジャラはヒンドゥー・カーストの中では、経済的に劣位に置かれている後進的カースト Backward Caste である。しかし、指定カースト・指定部族に入っていないため、法的には特別の恩典に浴することができない。
- 14) 科学技術や知識を用いて、貧困農村の生活水準を向上させることを目的とした「インドール乾燥地研究事業」も、ナハルケーダ村には何等の農業改善の影響をもたらさなかったことも、この点に関係する。「インドール乾燥地研究事業」については、Clark and Clay(1987)を参照されたい。

文 献

- Ballal, K.D. (1965) : *Census of India 1961, VIII (Madhya Pradesh), Village Survey Monographs, No.5 (Naharkheda)*. Delhi, Govt. of India, 68p.
- Clark, N. and E. Clay(1987) : The dryland research project at Indore (1974-80) : an institutional innovation in rural technology transfer. *Journal of Rural Studies*, 3-2, pp.159-173.
- Russell, R.V. and R.B.Hiralal(1916) : *The tribes and castes of the central provinces of India*. London, Macmillan and Co., Limited, pp.162-193.
- Sharma, M.L. eds. (1985) : *Census of India 1981, 11(Madhya Pradesh), Village Restudy Naharkheda*. Delhi, Govt. of India, 310p.